

船底

高岡 啓次郎

「まるで黒い猫みたいね。体が真っ黒で目だけがキラキラ光って」

先月はじめての職場から帰ったとき妻からそう言われた。今日も朝早くから船底にへばりついていて。唸るようなグラインダーの鋭い金属音が重なりあつて耳をつんざく。ケレン用の大トンカチで鉄板を激しくたたき音がそれに加わる。近くを通る汽船がエンジン音を残して通り過ぎていく。何十羽ものカモメが浜辺に黄色い声を響かせている。そんな騒がしい海岸が男たちの仕事場だ。

「ひつでえ錆だなあ、このボロ船はいいかげん廃船にしたほうがいんでないべか」

そんな誰かのぼやきが近くから聞こえてくるかと思えば、夕べ、かかあとやり過ぎて腰に力が入らないという油のぬけたような声を出すやつもいる。

「ところでガンジはなんぼ金もらってるのよ？」

左で作業していたヨシと呼ばれている職人が高志に訊いたが、高志は言葉をつまみ笑った。ヨシの本名は知らない。年齢は四十くらいだろうか。いつも針金のように瘦せた身体をくねらせている。声も体もひ弱そうに見えるが、ときどきシャツの付け根から濃紺の刺青を覗かせる。龍が彫られているらしく、鋭い目と髭が見えるときにはぞつとするほどの凄味があるが話し方は誰よりも静かだった。高志には、いつの間にかガンジというあだ名がついていた。昼休みにマハトマガンジーやキング牧師をはじめとする平和運動家の伝記を熱心に読んでいたことから誰かがそう呼びはじめたのだ。職人の多くは峰岸高志という彼の本名を知らないに違いないし、週に四日だけ働いている理由も分からないはずだ。

高志は二十歳になりたてのところから、小樽でPGAという平和運動に加わり、アフリカや東南アジアの貧しい人々に衣類や教材、義援金を送る活動にこそしんでいた。実際、仕事以外のほとんどをその活動に費やしていたといっても言い過ぎではなかった。二十三歳で太平洋側の苫小牧市に移り住んだのもその活動の延長だった。

移ってきた当初は適当な仕事もなかったもので、最低限の生活費を稼ぐため、バイクに乗って大量の新聞を配っていた。仲間の何人かがそうしていたし、活動し勉強する時間

そうしている間も、硬い尖った飛沫が、容赦なく作業員の顔を刺す。二十代も半ばを過ぎた高志のニキビの跡が残った穴だらけの顔にも、焼きゴテをあてられたような痛みが走った。ただでさえ薄暗い船底で、たよりにしている防塵用のメガネはさっぱり役にたたない。すぐに自分の吐く息で曇ってしまうのだ。スクリーンの周辺や船を支える架台の近くなどは危険きわまりない。高志は思わず舌打ちした。ベテランの職人たちの誰もが支給されたメガネをしていないことに気づいた。旧式のメガネはこれだから困る。口には出さなかったが、それを外して放り投げた。半開きの目を無理やり見開きながら作業が続けられた。古い塗料と錆の匂いに混じって潰れた貝殻の磯臭さが鼻をつく。

「せめて一万でも貰えたらなあ」

そう言うのは、どう働いても日給が六千円と決まっている右隣りにいる小倉のとつあんだ。真っ黒い顔から白い歯だけを異様に目立たせ、酒で焼いた喉から潰れ声で不満を漏らした。小倉が、ときどき休み時間にも焼酎のワンカッブを飲んでいるのを咎める者がいないのは不思議だ。炭坑夫を長く勤めたあと、墓掘り人からヒヨコの選定士、養蜂業と、数え上げたらきりが無いほど仕事をしてきた小倉は六十をとくに越えているが若者に負けない気骨と体力を兼ね備えていた。反対側からヌルツとした声が出た。小倉のダミ声に比べれば女のように細かい。

を生み出すには好都合だった。集金は王子製紙の社宅を受け持っていたから運が良かった。給料日が同じだし、夏などはアパートの下で大きな声であいさつすると、上の階まで声が通り、みんながお金を用意して待っていてくれた。

しかし、同じ活動で知り合った女性と結婚し、子どもができてからは、やはり新聞配達だけでは収入が足りなかった。結果として勤めたのがこの塗装店だった。読書好きな高志は、昼休みに自然にそうした関係の書物を読んだが、この職場では誰もがそのことには無頓着だったし、高志の活動について尋ねる者もいなかった。そこには自由な雰囲気、いや、自由すぎるといってもいいものがあった。互いに干渉せず、仕事と酒と麻雀を愛し、何をしていても艶めいた話をするのを忘れない人々がそこにいた。

その日、浜に上げられた漁船の船底では七人の男たちが働いていた。七月の太陽が砂浜を焼き、その潮臭い熱風が砂塵を巻き込んでながれてくる。まだ新米の高志は、まつ毛にもぐり込んだ鉄錆の痛みにも耐えながら必死で作業に加わっていた。数十センチ眼上には貝殻が隙間なく張りついていた鉄板がひろがっている。箱型の架台で支えられているが、地震で外れでもしたら全員が圧死するのは間違いない。

「こんな仕事ばかりだとかわんな。いつまでやるんだべ」小倉が誰はばかることなくつぶやくと、現場責任者であるナカさんが答えた。

「雪がふるまで大部分はこの仕事じゃないかな。今年から漁協だけでなく海陸会社からも塗り替えの話がきているみたいだ。聞いただけでも二十隻以上あるらしい」

「そんなにあるのか？ 船の塗装は儲かるんだべさ。俺たちの出面賃も少しは上がるべか、これだけきつい仕事してんだからよ。そうだべさナカさんや」

「どうかな、工事の単価はかなり安いらしいよ。でも大変なのは確かだから社長も少しは色をつけてくれるっしょ」

「そうでねえとやってられないべさ。なあヨシ」

小倉が高志を飛び越してヨシに話をふった。

「そうさなあ。社長に頼んでくれやナカさん。あんたの言うことなら聞いてくれるんだろう」

上半身をそらせたヨシの襟元から例の刺青が見えた。そんなことないですよとナカさんは答えた。

現場監督のナカさんはまだ三十代後半だが、十代のころから社長と組んで仕事をしてきたという。この塗装店では最も古参だが、話し方にごく遠慮がちな部分があり、数人の職人に対しては言葉使いが妙にいいねだった。

今日は朝から全員が夏の容赦ない日差しのもとで、砂の上に横たわっている。最初の仕事は、肩肘をつきながら船底にこびりついた貝殻を皮スキで大まかに削り落とすことなのだ。硬い貝殻は鉄板の錆と絡みあつて容易に剥がしきれない。腐食が進んだ部分は大きな専用のトンカチでた

いて錆を浮かせ、そぎ落としやすくする。

十時過ぎからは、ほとんどの職人が皮スキからグラインダーに持ち変えて仕事を続けている。午後になっても同じ仕事の連続だった。わずかな休憩をはさんで、鉄の巨大な板に男たちは挑み続けた。錆の下から銀色の肌が見えるまで、回転する粗いヤスリを執拗に船底に押しあてる。中途半端なケレン作業は検査でやり直しをくらうことになる。

そうなればあとで二倍の労力を使うことになるから誰もが運命に従うように真剣にならざるを得ないのだ。あお向けになった七人が地面を這いながら移動してゆく。

「ヒェ！」

ガキンという異常音と同時に突然の悲鳴があがった。高志がとっさに身構えたとき、砕けたグラインダーの刃が頭上にとんできた。

「どうした？」

小倉のとつとつあんが叫んだのと同時に高志も右後方をふり向いた。他の職人たちも、電動工具のスイッチを切って叫び声の方向を見た。いちばん外側にいる、みんなから大将と呼ばれているKが口を血だらけにして悶えていた。

「大将やったな」と、小倉が言った。

Kはグラインダーの操作を誤って顔を切ったのだ。高速で回転する丸刃を不用意な仕方でもリベットか何かにつか

がり、たちまちのうちにその高さが鼻の先端につながった。

ナカさんに連れられてKはすぐに現場を抜け、病院に行くことになった。ナカさんはテルという少し年上の職人に、自分がいない間の作業を早口で説明して車に乗り込んだ。

Kに、どうして大将というあだ名がついたのか高志にはその理由がわからない。そのころはやっていた海援隊の歌の影響なのかもしれないが、本当のところは不明だった。

Kは高志が入社したすぐあとに入ってきた二十才をこえたくらいの男で、トロンと下がった目に風船に似た頬をもち厚い唇が前に突き出ている。一見すると服を着たタコを思わせる風貌の男だった。そういえば、何度か行ったタコ焼きチェーン店の名前もそんなふうだった。

「けっ！ 二人分の仕事が増えたんでねえか。まったく大将のやろうは使いものにならないやつだ。何とかならんのかテルさん」

小倉が言うと、現場監督をまかされたテルは好色そうな苦笑いを浮かべて答えた。

「しょうがないべさ。三好さんの世話で入ったんだから。なにやら訳ありらしいぞ。三好さんが妾に産ました子でないかと言うやつもいる。本人は遠い親戚だと言っている。だが分からんぞ。あの人はメチャ手が早いからなあ」

「やり放題のあんたに言われたらおしまいだ」

小倉はそう言って高笑いした。三好というのは社長の弟

で営業をまかされている人だった。そんな他人の艶めいた話をするテル自身は二回の離婚歴があり、現在は娘ほどの女と同棲中だという。テルは絶えず卑猥な話をするのが趣味と言つてもいい男だが、最近どういうわけか同性のKにもやたらベタバタと体を絡ませる。だが仕事は手早く、腕の良い職人には違いなかった。二人が抜けたあと、仕事のペースを上げねばならないのは誰もが分っていた。今まで軽口をきいていた職人たちも無言で作業の手を速め、けたましい金属音を船底に響かせた。

午後の陽も傾きはじめ、早番のガラスが地平線近くを帰るころになると風が強まった。静かだった海はうねりだし、波よけのテトラに激しく波がたたきつけた。高志は深い井戸を覗いたときのような恐怖心を覚えた。その気持を払いのけながら動かす右手は、グラインダーが二倍の重さになったのを感じている。交互に持ち換える腕は振動で痺れ、もはや感覚さえない。一日でもつとも疲れが出る時間が到来していた。そんなとき、船底に妻の奈美江や小さな息子の顔が浮かんだりすることがある。もうひと頑張りだ。そう自分に言い聞かせる。片手で持ち上がらなくなった電動工具を両腕で支えながら思うことがある。千手観音のようにたくさんの腕があつたらどんなにいいだろうかと。

山へ帰るガラスの数が多くなったころ、暑さは嘘のよう

に去っていた。辺りには、いつの間にかひんやりとした海霧が漂いはじめている。急いで錆止めを塗らねばならない時がきていた。ケレンしたばかりの鉄は赤子か女の生肌のようにデリケートなのだ。その日のうちに覆ってあげないとすぐに錆がつく。一列に並んだ男たちがいっせいに新たな動きをはじめた。高志もそれに合わせて刷毛と塗料が入ったパチ缶を持つ。たちまち重金属が入ったドロドロの塗料が猛スピードで鉄板を覆いはじめた。

西に傾きかけた太陽に厚い雲がかかる。明るかった海は、すでにどす黒く横たわっている。白い波頭だけが気まぐれに光っている。仄暗い雲間から低く差し込む光は船底に頼りなげに届いていた。それがすっかり地平線に隠れてしまふのと競争しながら船体はみるみる濁った血の色に変えられていった。高志の衣服や顔は真っ黒な錆と赤い塗料の飛沫に悲惨なほど覆われていた。働く男たちは目の周りを黒くクマドリした歌舞伎役者さながらに、さも恐ろしげに目だけをギラつかせている。その様子は船底をねぐらにしている黒猫と変わらない。小倉のどつあんだだけが、自慢の白い歯をときおり見せている。

作業の最後にさしかかったころ、錆止めの赤い色はもはや漆黒にしか見えなかった。残業二時間。そんな毎日が雪の降るころまで続くという。疲労が限界になると、あしたは雨が降らないものかと誰もが思うのは無理もなかった。

角で軽く叩いてから素早く対象物に移動させる。塗る部分の真ん中に塗料を乗せて均一に上下に動かす。とりわけ天井に向かって塗るときは塗料を含ませた刷毛の滞空時間を短くしなければならぬことも分かってくる。いりくんた金具やボルトには塗料を押し込むように毛先を叩きつける。刷毛先は止まっても含んでいた塗料は移動して細い隙間に入っていく。

「慣性の法則だな、これは」

好きだった物理の法則を塗料の移動にあてはめて勝手に納得したりした。暗中模索の三ヶ月が過ぎたころ、コツらしきものを高志は少しずつ身につけつつあった。しかし依然としてその動きはたどたどしいものに違いなかったが、彼を嘲弄したり罵声を浴びせる職人は誰もいなかった。しかしただ一人だけ、少しあとに入ったKだけは競争心からくるに違いない妬みに満ちた鋭い視線をときどき投げかけてきた。高志が無難に仕事をこなし、塗るスピードを上げていると、Kは厚ぼったい唇を尖らせて、顔全体に不満をにじませる。彼は常に自分と高志を比べているようだった。

社長のほからいで、高志はいつも小倉と仕事を共にした。その理由は明確に分からないが、少し肌合いの違う新人を包容力のある小倉と組ませたのかもしれない。高志は小倉のことを皆と同じように、どつあんとは言えなかったが、飾り気のない老職人に自然な親しみを感じるようになった。

初めて船底の仕事をしたとき飛び散る錆の激しさに驚いたが、本人以上に衝撃を受けたのは妻の奈美江だった。彼が仕事の車で現場からそのまま家まで送ってもらったとき、あまりにもすさまじい全身の汚れかたに、高志が玄関のドアを開けたとたん奈美江が「うわっ、怖い！」と叫んだあと冒頭の言葉をはいてから続けた。

「お願いあなた、床が汚れるからこの上を歩いてくれないかしら」そう言っただけで奈美江は風呂場に向かう床に急いで新聞紙を並べた。高志は上がりかまちで泥だらけの靴下をぬぎ、自分の家に泥棒に入るような忍び足で浴室に入った。そんなにひどいのか——。そう思っただけで鏡を見たとき愕然とした。何という姿だろう。現場では暗くてよく解らなかった。明るい照明にさらされたその姿はまさに黒猫。しかも赤錆色を体じゅうに垂らしたさまは血を流した怪猫そのものだった。

塗装店に就職した当初から、誰かが高志に塗り方を指導してくれることはなく見よう見まねで覚える以外になかった。先輩たちのテクニクを盗み見しながら夢中で刷毛を動かした。なぜ素早い速度で美しく塗れるのか。どうして塗料が垂れないのか。観察していると職人たちの塗り方には一定のパターンがあることに気づくのだ。毛先を整えた刷毛先三分の一ほどに適量の塗料をつけ、パチカンの

小倉は入社して三年足らずだが、豊富な人生経験で身についた物怖じしない態度のせいかな軽んじる者はいなかった。堂々とした体格を持ち、錆の汚れを落としても変わらないほど浅黒く光った顔をしており、誰よりも声に生気があった。

小倉が早いうちから、あなたは筋がいいぞと言ってくれたことは高志に大きな自信を与えた。無意識に動かす刷毛づかいがこの仕事にむいているというのだ。小柄で痩せた体に劣等感を抱いていた高志だったが、塗装職人にはそのほうが向いていると言ってくれた。

「軽いのでどこにでも上がれるし、入り組んだ配管の中にも入っていける。きのう社長にも話しておいたぞ。あの人はいいペンキ職人になるってな」

小倉の話しかたに恩着せがましいところは少しもなかった。高志を見る目はなぜか温かみに満ちていた。現場で二人だけで弁当を食べるときも小倉がおもに話をした。

「俺は四十までは夕張で炭坑夫をしていたんだが、仲間がたぐさん落盤事故で死んだ。俺はたまたま非番だったから助かった。それから何年もしないで炭坑はだめになったさ」小倉は尋ねもしないのにそんなことを教えてくれた。閉山で仕事を失ったあとのことを気軽に話してくれる。それが高志には楽しい経験となった。ときにはニワトリの選別をしていた場面にもふれる。

「ヒヨコの雄雌を見分けるのは難しいんだぞ。素人が見ても分かるもんじゃない。俺らは瞬時に選別に分けたもんだ」
 そう言つて手を左右に動かして選別のポーズをとる。目にもとまらぬ速さに高志は口を開けたまま話を聴いていた。
 「養鶏場のニワトリは悲惨だぞ。狭い箱に閉じ込められて、口ばしを半分ちよん切られるんだから」

「口ばしを切るのですか。どうして？」
 「餌をたくさん食べさせるためさ。そして卵をどんどん産ませ、あるものは肉になる」

「ひどいことしますね」

「人間のすることはそんなもんだよ。みんなが有り難がつて食べているんだから同罪だべな」

小倉の話はどれも面白く笑いを誘う。おかげで慣れない仕事を何とか続けることができた。体全体から土臭い男らしさとおおらかさをみながら小倉を高志は好きだった。幼いときから父親がいなかった小倉は満ちた男を見ると、心に空いた穴のどこかにその人物を収めてしまうところがある。そうした気持は小倉にも伝わるらしく、休みの日などに酒瓶を片手に高志の家に来ることがあった。

「ガンジさんいるかい？」

そんなとき、高志は生まれて半年にしかならない息子を膝に抱きながら酒の相手をしたものだ。酔うと（来たときからすでに酔っているのだが）このうえなく上機嫌に、白

か不思議ね。わたしも母に似て歯が悪いから真似てみようかな」
 奈美江は男の子を抱いて奥の部屋に入つていった。高志が上気した顔で立ち上がると、古アパートが小刻みにゆれだした。窓の外に目をやると、鉄路の上を室蘭行きのコンテナ車が長い時間をかけて通りすぎていった。

半年前、子どもができて足りない収入を何とかしなければと思つたとき、配つていた新聞の区域で塗装店の看板が目がいった。小樽の工業高校で電気の勉強をした彼には縁もゆかりもない職業なのだが、高校時代から油絵の魅力に傾倒していたから、色彩を扱うという、ただそれだけの共通点を手懸かりに事務所のドアを叩いた。

中から中背でがっしりした体格の男性が出てきた。豊かに波うったグレーの髪と、整つた顔立ちのその人は、表情にどこか理知的な雰囲気を持たせていた。白衣でも着せれば大病院の医師に見えなくもない落ち着いた風貌だ。上品な黒ぶちメガネをかけており、歳のころは五十ほどに見えた。自己紹介して仕事のことを尋ねると、静かにうなずいて厚めの下唇をかみ締めるようにしてひとこと言つた。

「いつでも相談に乗つてやるから来い」

紳士的な風貌とは違う親分調の切れの良い言いかただった。しかしその話し方には突き放したようなところはなく、

くそろつた大きな歯を出しながら笑つたり歌つたりするのだった。選ぶ曲は浪曲風の演歌がほとんどだった。しかし、その滞在は短くアッサリとしたもので、必ず子どもの頭を撫でて帰っていく。その種の訪問にありがちな凶々しさは少しもなく、さわやかだった。

「面白いおじさんねえ」

奈美江はそう言つて、小倉がおいていった一升瓶の残りを片付けた。

「あのおじさん六十五歳にもなるのに虫歯が一本もないそうだ」

「すごいわね。どうしてそんなに丈夫なのかな」

「塩だけで丹念に磨くらしい。しかも歯ブラシを使わず指で磨くのだそう。だけど、アルコールでいつも消毒しているせいかもしれない。でも休み時間にワンカップを飲むのはいけないなあ、どうして誰も注意しないのだろう」

「それはいくらなんでもまずいわよ。ケガをしたらどうするの。社長さんは知っているの？」

「知らないだろう。知つていたら許すはずがないさ。古くからいるナカさんという現場監督がいるんだが、なぜか遠慮して言わないんだよ」

「入つたばかりのあなたが言うわけにもいかないしね？」

「そりやそうだ」

「それにしても、歯磨き粉を使うより塩がいいなんてどこ

堂々としたなかにどこか誠実さを感じさせる響きがあった。高志は夕方の配達をすませて二時間ほど後に再びそこを訪ねた。応対ぶりからして塗装店の社長に違いない男性はさつきとまったく同じ表情で「おう、入れ」と言つてすぐに家に招き入れてくれた。高志を座らせたあと、吸いかけのタバコを灰皿でもみ消してから一呼吸おいて言つた。

「どこに住んでるのよ？」

「三年前からG町に住んでいます」

「嫁さんはいるのか？」

「妻と半年前に生まれた息子がおります」

ふーんとうなずきながら経験はあるのかと社長は尋ねた。「はい、少しあります」

仕事をしたかったのでそう答えたが、すぐに補足しなければならなかった。

「塗装屋さんに勤めたことはありませんが鉄骨を塗つたことは何度かあります」

それは事実だった。空調会社にいるとき、機械の架台や配管に塗装することがときどきあった。しかしそれは細かく突っ込まれると経験というにはあまりにも頼りない。だが社長はそのことをとりたてて追及もせず話を続けた。

「幾ら欲しいんだ？」

高志が述べた金額は未経験の素人にしては低い額ではなかった。PGAで活動をしていることも正直に説明した。

それで時間を生み出すため新聞配達をしていたのだが、結婚し子どももできたので、と言うと、

「その活動は金になるのか？」と訊いた。

「いいえ、金にはなりません。ボランティアですから」

「若いのに感心だな」

高志は口には出さなかったが、頭の中には小樽で老体に鞭打ちながら病院の賄い婦をしている母親のこともあった。母親は誰にも頼らずに暮しているが、できれば少しの仕送りにはしてあげたい。ボランティア活動に力を入れたので週に四日だけ働かせてもらいたいと率直に希望を述べた。

それに対して、社長は余計なことは何も言わず、表情も変えなかった。初対面の人間に対して普通は見せるであろう警戒心を示そうともせず権力ある王のように即断した。

「分った。いつでもいいぞ」

それだけの短い言葉を、まるで何ヶ月も前から覚悟を決めていたみたいに躊躇なく言うのだった。こうしてあっさり和高志の就職は決まってしまった。社長からはそれ以外にいつさい質問されず、どういうわけか履歴書を出せとも言われなかった。高志はその月で新聞店をやめ、翌月から塗装店で働くことになった。

その塗装店は一般住宅を手がけるのは稀で、鉄工所の錆止めや工場に据えつけられた機械、配管の塗装をおもに請け負っていたが、数年前からは船舶の塗り替えに比重を

ずえるようになっていた。高志の仕事は当初からひたすら錆を落とすこと（ケレン作業）に集約されていた。毎日全身を真っ黒にして家に帰り、すぐにシャワーを頭からかけると、たちまち赤茶けた流れが足もとにできる。

耳や鼻の穴はいくら洗っても黒い汚れが湧き出てくるし、鼻の中からは黒かびのような飛沫がいつまでも滲み出る。

まつ毛の間に絡みついた汚れは簡単に落ちない。女が化粧で目をパッチリさせるのと同じように見えるが本人は痛くてたまらない。シャワーの最も力がみなぎる部分に目の玉をさらす。赤く充血した眼球からはいくらでも黒い涙のようなものを目頭に溜まる。風呂を出てからも唾を出したり鼻をかんでは黒いシミを出す夫を見て奈美江はつい聞かざるを得なくなるようだ。

「マスクはしないの？」

「していてこうなんだよ。どこからでも入り込むんだ。防塵メガネもすぐ曇って使い物にならない。視界が悪いとかえって危ないし」

「身体に悪いね。友だちが言ってたよ。塗料を吸って子どもがでなくなる人がいるんだって」

「そんなことないだろう。みんな普通に子どもがいると思っようよ」

「そうかしら……ひとりだけじゃこの子がかわいそうよ」

奈美江は溜息混じりに言って眠っている子どもを見つめ

た。高志は首や頬に出ている吹き出物を気にしながら指で触っていた。むかしからニキビが多いが、この種のできものが最近多いのは気にはなっている。

「あんまりいじらないほうがいいわよ」

ただでさえニキビの跡が見苦しいのだ。それ以上顔が荒れたらどうするのでも言いたげな顔をして見ている。喉まで出かかった言葉を引っ込める自制心をもつ妻に高志はときどき感心することがある。

奈美江が心配するのは無理もない。船舶塗料に含まれる鉛や錫といった金属が、いかに身体によくはないかは誰でも知っていた。しかし、妻が心配そうに見つめても、高志は力なく口を歪めて笑うことしかできなかった。なにせ簡単に仕事は見つからない。船舶塗装は確かにきつい作業には違いないが賃金は安くない。少々なことでも泣き言を口に出すわけにはいかないのだ。冷え込んで曇ったガラス窓を指でぬぐいながら、高志は行き交う車の流れを意味もなく眺めた。辺りには夜霧が漂いはじめている。視線の向こうには昔の光景が映っていた。

高志が九歳のときに父親が失踪した。兄は十一歳、妹はまだ五歳だった。六歳上の長女は少し前に事故で亡くなっていた。父親がいなくなったら日から母親と子ども三人の、やせ我慢ともいえるような生き方が始まった。父親を恨む気持を押し殺しながら、母親を助けるためにさまざまなア

ルバイトをして稼ぎを家に入れたが、当の本人は、親孝行だねと人に言われるのがいやだった。そうした環境の中で、高志は良くも悪くも妙に大人びた内面の成長をとげた。

中学を出てから夜間高校に通いながら勤めたのは暖房機やボイラーを据えつける空調の会社だった。とりわけ高志は大きな食品会社に据え付けた空調機のメンテナンスに駆りだされた。ドロドロに溶けた魚肉の詰まった排水溝に高志が平気で手を突っ込んだりするとき、傍にいる上司が思わず気持悪がって後ずさりしながらニヤリと笑う。

「おまえ、よく平気でやれるなあ」

蜘蛛の巣をかき分けて天井裏のダクトを修理するのも高志の役目だった。太った上司はとりわけ天井裏に上がることをいやがった。以前、ある会社の社長室を突き破ったことがあるらしいのだ。小柄で痩せた高志にはもってこいの仕事というわけだ。油だらけの排気グリルを清掃するのも大変な仕事だ。家庭用ならいざしらず、大工場についているのはとてつもない大きさなのだ。

妹が高校を卒業して信用金庫に勤めたあと家計は少し余裕が出た。高志がPGAの活動で苦小牧に来るとき、母親は何も言わずに送り出してくれた。身体が弱かった兄はアルバイト程度の仕事に就いたり辞めたりをくりかえしていた。高志が手っ取り早くはじめた新聞配達の仕事はバイクに乗っての広範囲なものだった。雨の日の大変さも大雪の

比ではない。バイクで雪をこぐのは至難の業なのだ。でも最も危険なのは何日も雪が降らない日だ。凍りついた道路で何度バイクごと転倒したことか。そんな日でも寒風を突いて岸壁を猛スピードで走りぬけフェリーターミナルに新聞を届けた。よくケガもせず、海に落ちなかったものだ。

「あなた、コーヒーが入ったわよ」

奈美江の声がかからなければ、高志の回想は続いていたに違いない。胸元に組んでいた腕に風呂で落としきれなかったペンキがついていた。その先には爪の間に深く汚れが入り込んだ指がある。それをじつと見つめながら、ここへこたれるわけにはいかないと思うのだった。俺はそんなにヤワではないぞ。高志は自らにそう言い聞かせながら、奈美江がくれたコーヒーを飲みほした。やせ我慢でも何でもいい。人は多かれ少なかれ同じような思いをしているのだ。そう思ったとき、夕闇のむこうを客車の窓灯りが幻想的に夜霧を突いて通りすぎていった。

そこで働いている人たちは、品の良さとは縁のない、がさつで好色な男たちが多かったが、概して素朴な人々だった。危険な雰囲気を持たせている職人も少なくなかったが、仲間うちの喧嘩を見たことはなかった。ただ一度だけ、コージと呼ばれていた茶髪の若者が危ない兆しを見せたことがあった。ふだんは黙々と仕事をする青年だったが、その

のだ。そのことがあとで職人たちの間に不協和音を醸し出すことになるうとは夢にも思わなかった。翌日、社長に呼び出された。タバコに火をつけて軽く吸い込んでから社長は煙をゆっくりはき出しながら口を開いた。

「おまえもバカだなあ。給料のことは聞かれたからといってベラベラしゃべるもんじゃないべや」

「はい、すみません」

「古くからいる連中だっておまえより安いのがいるんだからな」

「うかつでした」

本当にうかつだった。高志は気づいていなかったのだ。そこにはいろいろな職人が、さまざまな事情のもとで勤めていたということ。給料単価も簡単に線をひくようなものではなかったに違いない。

「まあいい。もう何日か余分に出て来い」

社長は煙を大きくはき、足を組み変えて言った。翌週から高志は、P G Aの活動を減らし、余分に働くようになった。そうすることによって帳尻を合わせ、何人かの非難をかわさねばならなくなった。その後、皮肉を言う者はいなくなつた。それでも高志は週に二日ほどは会報の記事を書き、未開発地域にいるスタッフたちの写真展でプレゼンをしたり書籍を販売したりした。

しかし、そのころから高志はP G Aの活動から徐々に距

日は運転しながらなぜか苛立っていた。強引な追越しをかけてきた車に切れたコージは交差点で運転席から飛び出た。そしていきなり前車の窓を開けさせ、運転手の襟首をつかみ、しこたま恫喝したのだ。そのときは恐ろしいほどの殺気に似たものが漂っていた。だが、コージは降りていった刺青のヨシに咎められた。すると、ハッとか何を思い出したような表情をしてすぐに手を離れた。

現場責任者であるナカさんの妙に遠慮した態度といい、コージとヨシのやりとりといい、高志には何がなんだか分からなかったが、あるとき彼らの素性に気づかされることがあった。六人乗りの車で男たちの真ん中に挟まれて地方の現場に向かったことがある。そのときの何人かの会話を驚かされた。刑務所にいたときの思い出話だったのだ。そのやりとりが頭ごしに交わされていた。

自分はどうでもないところに就職したのではないかと思つた。だがそう思つたのはつかの間だった。冷静に考えてみれば、すでに数ヶ月を彼らと行動を共にしていて警戒心を抱かせるようなことは一つとしてなかったからだ。家に帰ってから、とりたてて気にはならず、さまざまな人々が世の中にはいるものだと思ふに過ぎなかった。

しかし高志は一度失敗したことがあった。以前ヨシに聞かれたように、コージからも「あんた日給幾らもらっているんだ？」と尋ねられたとき、つい正直に言ってしまった

離を置くようになった。きつかけとなったのは、集めた寄付金の一部が幹部の飲み食いに頻繁に使われていたことを知ってからだだった。矛盾を感じ、みんなの前で疑問をぶつけてからというもの、何人もの役員たちから締め出しをくらうようになった。やがて名古屋にある本部で、集められた寄付金が某政治団体に流れていたことが明らかに、高志は活動から離れた。七年間の活動はなんだったのか。そもそも何のために自分はこの町に来たのか。空しさが込み上げてきた。それは妻の奈美江も同じであつたろう。だが、二人が同じ活動を通じて知り合ったのは事実であり、そのことに後悔はなかった。

より多くの時間を仕事に費やすようになった高志は、必死で塗装職人としての腕を磨いた。二年を過ぎたころには古い職人たちにけつして劣らない働きができるようになっていた。しかしそれはあくまでも船舶の塗装に関してであり、他の分野ではまだまだ未経験者の域を出ない。

いつのころからか、高志は材料の調達の仕方から塗料の価格、不足した足場の手当て方法や高所作業車のリース代にいたるまで、職人には直接関係のないことまで興味をもつて質問するようになった。それから一年後に自分で塗装店を始めようと思つていたわけではないが、なぜかそうしたことに関心があつた。小学生のころから廃品を売ったり、

数えきれないほどのアルバイトをしてきた彼は、物の単価というものになぜか関心が働くのだった。

そうした質問にとりわけ親切に答えてくれる人物がいた。それは老職人の小倉ではなかった。小倉はそうしたことに無知だった。高志が選んで質問したのは、みんなからトシと呼ばれていた若者だった。トシは二十歳そこそこと若いのに何でも知っていた。ウエーブがかかった長髪を持ち、背が高く、額に垂れ下がった髪の間からきれいな目を覗かせている。雰囲気が他の職人たちとは異質だった。

トシはいつもモンキーズの曲を好んで繰り返しテープでかけていた。まだ学生のようにも見える彼が自由に車の中でテープをかけ、デイドリームを口ずさむことに文句を言うものはひとりもいなかった。高志はまもなくその理由が理解できた。小倉がそれとなく教えてくれたのだ。

「トシは、社長の今いる奥さんの連れ子なんだよ」

「でも苗字が違いますね」

「いろいろあるんだべさ。社長も若いころは手いっぱい遊んだらしいぞ」

「そうなんですか」

高志は小倉とのそうした会話でトシが皆から一目おかれている訳が理解できた。しかしトシにはそんなことを鼻にかけるようなところは少しもなく、明るく若者らしい屈託のなさを常に見せていた。

もしやこのままだこかへ連れ去られるのではないか。高志はそんな不安に一瞬襲われた。しかし、そんなことはあるまいと否定しながらやりかけた下塗りを続けた。二時間ほどでひと仕事を終えて甲板に出ると船はまさに室蘭港に入ろうとしていた。頭のはげた五十がらみの船長が、ごくろうさんと言って温めた缶コーヒーを渡してくれた。高志は安堵しながらそれを飲み、錆び付いた鉄骨の建物が目立つ室蘭港の周囲を眺めまわした。コンビナートに春の日差しがそそぎ、海鳥たちが宙を行き来しているのをどこか清々しい気持ちで見つめた。タンカーが水先案内のタグボートに先導されて港の奥に入っていた。橋の手前あたりに差し掛かったとき大きな汽笛が鳴った。それを見届けてから、高志は再びタンクに潜り込んで仕上げ塗りにとりかかった。

暫らくなりを潜めていたKからの嫌がらせがエスカレートしだしたのはこのころからだ。当初から抱いていたに違いないある種のライバル意識が甦ったかのようだった。そのころになってもKは相変わらず大將と呼ばれ、新人のときと同じような雑用を仲間から押し付けられていた。それも無理からぬほど彼の仕事ぶりには上達が見られなかった。そうしたことが必然的に皆をしてKを軽んじさせた。そうしたときに溜まったであろうKの鬱憤は同時期に入った高志に向けられた。

そのころから高志はときどき小さな現場をまかされることがあった。新人を連れていくこともあれば、小倉と組んで出かけることもあったが、いつの間にか細かな采配は高志がとるようになっていた。元気がよかった小倉も、このころは肝臓に微妙な変調をきたしていたらしく体力が落ちていた。おそらく酒の飲みすぎによるダメージに違いなかった。つい最近まで休み時間にワンカップを飲んでいた習慣はさすがにやめていた。小倉は疲れやすく、しばしば会社を休むようになっていた。

世の中が北朝鮮による拉致問題で騒ぎだしたころ、高志はあるときたった一人で商船の水タンクの塗装をまかされたことがあった。ナカさんに連れられていった岸壁には横付けされた商船があった。風が静かで波は荒くないので、ときおり感じる海への恐怖心はなかった。船には誰もいないように思われた。ナカさんと乗り込んで船底にある機関室に入ると、人間が一人しか入れないようなタンクがあった。ナカさんは高志に仕事を指示したあと、頼むなどと言って帰っていった。そうした狭い小さな空間に入り込むには小柄な高志はうってつけだった。ところがなんと、指定された塗料で仕事を始めたとき船のエンジン音が聞こえてきた。ついで船は前後左右に激しく揺れ始めた。

「あ、動いている！ 人がいたんだ」

論理だてて話をする能力がどこかで欠落していたKは信じられない危険な行動をとるようになった。並んでグラインダーをかけていたある日、Kが妙に高志の近くにきた。狭い間隔で作業をするのが危険なのは明らかだった。それなのにKは高志の手が置かれている部分目がけて回転する刃を不用意に近づけるのだった。手をよけなければ間違いなく指の一本や二本が失われても不思議はなかった。高志が睨みつけて離れるときKは不敵な笑いを浮かべていた。それに類することは何度かあったが高志はあえて社長に言うことはしなかった。

しかし次に起きたことはそんな生易しいものではなかった。全員が油運搬船の甲板でサンドブラストの片づけ作業をしていたときのことだ。空気圧縮機で高速の砂を飛ばし、複雑な形をした機械類の鉄錆が落とされた。そのあと、甲板に溢れている錆が混じった重い砂をスコップで船外に掻き出さねばならないため全員が作業にあたっていった。

一時間ほどでおおかたの砂を運び終わり、ほうきを使っての清掃が始まった。やがてその作業も終りに近づき、多くの職人たちが船から下りかけていた。そのとき一瞬だが高志とKだけが甲板の片隅で一緒になるときがあった。恐怖が訪れたのはそのときだった。周りに人がいなくなったのを確かめるようにして、Kがものすごい形相で高志を睨みつけ近づいてきた。手には長い金属製のケレン棒を握っ

ている。Kは鋭い刃をこちらに向けながら不気味な動きを見せてにじり寄ってきた。「分っているだろうな」とでも言わんばかりの殺気でたちまち高志は船縁においつめられた。眼下には荒い波がとぐるをまいてうねっていた。そうした波を見るたびに浮かぶ恐怖心もまた彼を威嚇していた。そのとき咄嗟に高志から言葉がでた。

「このことは三好さんに報告させてもらうぞ」

高志はKが社長の弟である三好の世話で塗装店に入っていたのを聞いていた。もしかしたら三好は少々問題があるKの身元引受人なのかもしれない。そのあと高志の勘は的中したようだった。三好という名前を口に出した途端、Kの態度は脅えに変わったのだ。

「頼むから言わないでくれ！」

さつきまで体じゅうから発散させていた危険で不気味なオーラが弱々しい哀願に変わっていた。Kは背中を丸めて船から逃げ出すように下りていった。

助かった……。本当に危ないところだった。高志はそのとき誰も見ていないところでこんなふうにして死んでいく人間が世の中には少なくないのではないかと思うのだった。それと同時に、このときを境にして高志の中で何かが変わった。彼は初めて職場を去るという考えが頭を掠めるようになった。

二歳上の兄の五人が、道端でとったフキの日傘をさしながら海沿いの道を歩いた。トンネルを抜けるとすぐに朝里の青い海が広がった。みんなは石浜に腰かけてお菓子を食べたあと、蟹をとったり、岩にくっついたツブを集めたりした。波は静かで、近くで何人もが泳いだり焚き火をしたり寝転んだりしていた。

「二人ともここで遊んでいてね。姉ちゃんたちちよつだけ泳いでくるから」

姉は浜で遊ぶだけだからと父親に言っただけだが、服の下にはちゃんと水着をつけていた。高志は姉の友だちの大人びた水着姿を見たとき、なんだか見てはいけないものを見たかのような衝撃を受けた。

姉たちが海に入りはじめてまもなく風が強くなってきた。さつきまで平気で座っていた岩の上を波がおおいかぶさっている。姉が溺れ死んだのはその直後だった。しかもそれは高志の目の前で起こった。姉が深みにはまってものがく断末魔の瞬間を見てしまった。高志が大声で叫ぶと同時に近くにはいた大人が助けに向かったが遅かった。丘に上げられた姉が必死の人工呼吸で目をさますことはなかった。

父親が失踪したのはその年の冬だった。翌年、判が押された離婚届けが母のところに届いた。父のその後の行方は今も分からない。

「今ごろどうしているものか……」

その日から高志は明らかに脅威を感じはじめた。危機一髪とはあのことだ。あのとき咄嗟に三好さんという言葉がでなければ自分は海の藻屑になっていたかもしれないのだ。高志は幼いときのトラウマが災いして海がとてつもなく怖いのだ。それからしばらくしてからも、高志は奈美江に職場で起きた危険については話さなかった。心配性の彼女のことだから余計な悩みをかかえて眠られなくなるのは目に見えていたからだ。

ある夜、フトンで横になりながら寝息をたてる奈美江と息子を見た。その仄赤い明りの向こうには幼いときの自分と姉の姿が映っていた。あれは八歳のときの夏だった。中学生の姉が友だちと何人かで朝里の浜に遊びに行くという話を聞いて連れていってくれとせがんだ。母は朝から乾物屋の加工場に行っていて留守だった。家具職人だった父親は家の作業場で頼まれた椅子の修理をしていた。

「子どもだけで行ったらだめだ」と父親は言った。

だが姉が代表して父親を説得した。

「今日は風もないし、浜で遊ぶだけだから。ねえ、父さんお願い、いいでしょう？ ツブをとってきてあげるわ。父さん、お酒のさかなにするの好きでしょう」

父親っ子だった姉に甘い声で言われ、父親は「弟たちから目を話すなよ」と言っただけで許可した。朝里の浜は高志の住む桜町からは遠くない。姉を含む中学生三人と高志、それ

高志は天井にできた雨漏りのシミを見つめながら久しぶりに父親のことを考えた。生きていいのか死んでいるのかも分からない。周りの親戚はときどき思い出したように父の無責任を責める人もいれば、親切にされたことを懐かしむ人もいる。だが不思議と高志には父親に対する恨みというものが残っていない。娘を亡くしたあと父親が深いうつ状態におちいったというのを聞くと、残された母も哀れなら、去った父も哀れなのではないか。そんなやるせないものを感じるのだった。

高志は風にゆれる窓の音を聞きながら、再び不安にかられた。あのときのKが恐ろしい敵意を顕わにしたのは間違いない。あそこには殺意が存在していた。誰かに話しても思い違いだろうと言われるかもしれない。だが高志自身はあれが明らかな殺意だった気がする。たまたまあのときは鋭い刃をひっこめたが、これからも同じようなことがないとは限らない。唇が声にもならないほどかすかに動いた。

「新しい仕事を捜さないといけないかな」

職場を去ろうと考えた理由にはKにまつわる別のできごともあった。それは昼休みに練り広げられる狂態だった。Kがテルに悪戯で受けた同性的な愛撫が病み付きになり、せがむようにして淫らなことを口走るのだった。テルはそうしたKをからかうように狂態への悪乗りを続けていた。それを注意する者は一人もなく、全員が笑いに加わる昼休

みの余興となつてしまった。

高志はある日そのことを現場責任者のナカさんに話したことがある。だがナカさんは、いつも近くにある自分の家で昼食をとるため、ただ笑っているだけでとりあおうとしなかった。こうした雰囲気慣れていない高志はいたたまれなかった。いや、そんなことに慣れた人などそういるはずはない。そうした場所で平気で飯を食べ続ける凶太さを彼は持ち合わせていなかった。

自身の内部で黒い塊がうごめいていた。組織への不信。大いなる者への不信。道徳への不信。自分を含めて人間そのものへの不信が船底で目を光らせる黒い猫みたいに心をかすめ、ざわざわとした感触をともなつてにじり寄ってくるのだった。長年にわたつて信じてきたものが瓦解しはじめていた。何が善で何が悪かも分からなくなつてきた。不可知論が心を強く支配しはじめていた。

それでも生きねばならない。やせ我慢の生き方はやめようがなかった。高志がここを辞める決意をしたのはそれからまもなくだった。社長は理由をいっさい聞こうとはしなかった。最後の日、世話になつた挨拶に行くと社長はわずかに意外な顔をした。

「辞めるとき挨拶に来たのはお前が初めてだ。達者にやれ」

「ありがとうございます。社長もお体に気をつけて」

「おう、近くへ来たらいつでも寄れや」

何かの書類に印鑑が必要だからと預けておいたのを思い出した。そのころ、会社が借金を返すために職人が知らないうちに多額の生命保険をかけて殺したという事件が何件か続けて起きていた。根拠の希薄な妄想に過ぎないとは思いつながらも、元来が用心深い高志は動物的な危険を感じ、理由をつけてそこを辞めた。それが正しい危惧であつたか、まತ್ತたくの疑心暗鬼であつたかは分らない。だが、「これからは鉄骨の時代だよ」と得意げに言つていたこの塗装店の社長がいくらしらないで多額の負債を残して突然店を閉めたことを知人に聞かされたとき、辞めて正解だつたと思えるのだった。

そんなこんなで、結局のところ高志はいつの間にか自分で仕事を始めることに踏み出してた。そのとき、さまざまに材料の調達方法をトシから聞いていたことが役立つた。彼は手始めに自分の家の近くを回り、錆びた手すりや屋根を見つけては家の人に声をかけた。

初めて受けた仕事は、ある歯科医の自宅を取り囲んでいた白いフェンスだった。錆びた鉄骨をケレンし、錆止めを入れ、仕上げを二回塗るといふ、けつして難しい仕事ではなかった。三日で仕事を完成させたあと、医師の奥さんが値段と出来栄えに満足を示してくれたことは大きな自信となつた。それから高志は少しずつ道具をそろえ、仕事をこなしていった。数カ月後には正式な届けを出して塗装店を

「はい、そうさせてもらいます」

社長の言いかたは、初めて会つたときと変わらないほどあつさりしたものだった。引き止めるわけでも、このあとどうするかと尋ねるわけでもなかった。

翌日からさつそく高志は新聞の広告からアルバイトを含む仕事探しを始めた。塗装工の求人ほどきどき出ていたのをあらかじめ知つてはいた。だからこそ辞める決断ができたとはいえる。連絡をとつた最初の塗装屋は市内にある大工場の内部で何百メートルもある手すりを塗るといふ職人を募集していた。高志は翌日から勤めはじめた。ところが二週間手伝つて約束の日に給料を貰いに行くといふ主の家はもぬけの殻で電話も通じなくなつていた。

二軒目に行つた塗装店の社長は自信たつぷりにこう言つていた。

「これからは鉄骨の時代だよ」

翌日から巨大な石油タンクの現場で働いた。十日ほど手伝いに行つたころ昼休みに突然言われた。

「明日からみんなと一緒にゴンドラに乗つてくれないか」

その足場はゴンドラというのは名ばかりで、足場板一枚を二本のロープで吊つただけのものだった。転落を防止する対策は特になく、頼りない板にお愛想ばかりの命綱をつけるだけだった。

高志は不気味な不安にとらわれた。その数日前に社長に

始めることにした。新しい材料や道具を学びながら彼は徐々に仕事の範囲を拡大していった。やがて車を整え、足場を購入し、大きな家を請け負うことができるようになった。二年目からは友人やアルバイトが加わるようになり、多くの仕事をこなせるようになった。

そのころ高志がスーツを着て営業で海辺を周つていたとき、しばしば見かける人物がいた。いつもサンダル履きで、焦点の定まらない目で歩いてたその男は大将と呼ばれていたKだった。いつも暇そうに歩いてた様子からして彼が仕事に行つていないのは明らかだった。いつもは遠くを素通りするだけだったが、あるときまともに目があった。まತ್ತたく違う服装の高志を見てKはすぐに気づかないようだった。何度かふり返りながら見ていた。虚ろなKの目は、どこかで見たことがある人物を必死で思い出そうとしていた。ようだった。

小倉の家の近くを通りかかつたとき、急に込み上げてきた懐かしさに引かれて立ち寄つてみた。すでに七十歳を過ぎていた小倉は仕事から離れて畑仕事に精を出していた。

「小倉さんお久しぶりです。峰岸です」

「は？ 峰岸さん……」

「ガンジですよ」

「あれ、ガンジさんか。そんなきれいな格好してたら分か

らんな。まあ茶でも飲んでいきなさいよ」

ひと頃より痩せた小倉は話し方も弱々しく、生気をみながら話していたときに比べると別人だった。話は自然と元いた仲間の話になった。

「俺はおとし辞めたんだが、残っているのはナカさんとコージくらいでないかな」

「コージってあの、ちょっと危ない感じの？」

「そうだ。すっかりまともになつたぞ。今ではナカさんの片腕じゃないか。テルは女と逃げて内地に行ったらしいわ」

「女って、例の若い子ですか？」

「いや、飲み屋で知り合った女だ。旦那がやくざで大騒ぎだったんだぞ」

「相変わらずお盛んですね」

「こりないやつだわ、あいつは」

「ヨシさんはどうしました？」

「あれ、ガンジさん知らんかったか？」

「ええ、ヨシさんが何か？」

「船から落ちて死んだんだよ」

「え？ いつのことですか？」

「もうかなり前だぞ。ガンジさんが辞めた次の年かな」

血の気がひいた。まさかそんなことはあるまい。脳裏にありありと残る記憶は船の上でKに追いつめられ危うく落ちそうになったときの映像だった。だが小倉の説明を聞く

いるそうだと。でもあいつらを怒らしたら怖いぞ」

「そうなんですか……」

高志はすべてを悟った。職場での職人たちのそれらしい会話が次々と浮かんで来た。そして自分が初めて塗装店を訪ねたときのこととも思い出した。社長が余計なことを知ろうともせず、自分を即断で雇ってくれた日のことが甦った。

それで履歴書を出すことさえ求めなかったのだ。高志は心の中に今まで味わったことがない熱いものがわき起こるのを覚えた。錆にまみれて船底で働いていたころのことが幼いときの懐かしい記憶のように思い出された。

そのころから高志は世話になった塗装店の近くを通ったとき、社長の顔を見に立ち寄るようになった。新しいプレハブの事務所ができ、社長はいつもソファーに座りながら足をガラストップのテーブルに投げ出していた。新しい事務員もいて、以前にはない家庭的な雰囲気も漂っていた。ここで働かせてもらったおかげで家族が生活していけることを感謝すると、社長は以前には見たこともないほどに相好を崩し、高志のささやかな活躍を喜んでくれた。

月日が過ぎ、二人の子どもが小学校に入ったころ、彼は数年ぶりに社長に会いに行った。何人かの安否を尋ねたところ、真っ白になった髪を撫せながらどこか淋しそうに社長は唇を動かした。

「小倉のとつつあんが去年死んだよ」

とヨシさんが別の塗装屋の応援に行っているときの事故だったという。そのときKも一緒について行かなかったかと尋ねたが、小倉は知らないと言った。孝志は何気なくKの様子を確かめてみたくなった。

「こないだ、大将が浜の近くをブラブラ歩いているのを見かけましたよ。辞めたんですね？」

「とつづくクビになった。シンナーをかつぱらってチンピラから金もらつておつたんだぞ。社長は警察に訴えなかったが、弟の三好さんは責任とるかたちで辞めたさ」

「社長も大変でしたね。ところで今だから言えるんですけど、何人かが刑務所にいたときの話をしていましたね？」

「なんだかんだ一〇人はいたぞ。入れ替わり立ち代りな」

「どうしてまた？」

「あの社長はなあ、刑務所から出所してきた人たちを更正させる活動をしてたんだよ。かなり熱心だったのところがうかな。ヨシもコージもそうだ」

「囚人の更正ですか？」

「そうさ。最初は驚いたべさ」

「はい驚きました。とんでもないところに入ってしまったのかと思つたこともあります」

「そうだろうな……」

「でも穏やかな人が多かったですよ。喧嘩もなかったし」

「それだけは絶対厳禁だったというぞ。働く条件に入って

その後、世の中にはバブル崩壊にともなう大嵐が吹き、高志もそれなりに翻弄された。元請けが倒産し、友人が自殺し、高志自身も多額の負債をかぶって金策に走りまわった。多重債務におちいりながらも、そこから這い上がるためにしぶとく、諦めず、殻をかぶり、見栄を張り、とりつくるい、がむしゃらに生きた。

さらに数年が過ぎたころ、知人を通して社長がガンに侵されていることを聞いた。高志がそのことを胸に秘めて立ち寄ると、すっかり老人になっていた社長は寝転んでいたソファーから嬉しそうに起き上がり、どうだ、儲かっているかと言つて最近の仕事のことを尋ねてくれた。

静かに聴いたあと、社長はなぜか神や仏のことを質問するのだった。むかし勤めているときに高志が頻繁にその種の本を読んでいたことを覚えていたのだろう。社長は回ってくる宗教団体のパンフレットを見せながら、どう思うか？ 人間にとつて宗教は必要だと思ふかと尋ねたりした。その唐突ともいえる質問は思いつきで軽々しく答えることができないう性質のものだ。高志はそれについて明確に答えるられなかったが、社長が自分のガンが原因で何かを模索しているのを感じ取れた。

このころから高志は仕事の都合で暫らく地元を離れることになった。室蘭で大きな建設会社の下請けの仕事が増え、三年近く家族ぐるみで移転していた。社長が亡くなったこ

とを知ったのは地元に戻ってきてすぐだった。すでに葬儀も終って数ヶ月が過ぎていた。高志は言いようのない寂しさに襲われ、伝えてくれた知人を前にして絶句した。

車を走らせ、近くにあった公園の木立の下に停まった。自分の中でひとつの時代が終っていた。赤く色づいた樹木のあいだから枯葉が音をたててフロントガラスに降りそそいでいる。二羽の鳥がしわがれた声を出しながら公園の葉だまりに舞い降りた。仲間と離れてこの町に住みついたカササギがいることを地元の新聞で読んだばかりだった高志は自分が平和運動への理想を抱いてこの町に来たときのことを思い出した。今の自分はその活動から離れ、このカササギのようにすっかりこの町に定着して家族を持っている。思い出の場所を訪ねてみたのは、秋がすっかり終わり、最後の葉っぱが樹木に数枚ばかりかじりついているころだった。その日は風も強く、いつ空から白いものが降ってきてもおかしくないほど寒々としていた。

その場所は荒れ果てていた。何台もの使われなくなった車が放置され、誰もいない事務所も閉じられていた。窓から覗くと乱雑に椅子や机が積まれている。誰も塗装店のあとを継ぐ者はいなかったのだろうか。気になった高志は隣の人に尋ねてみた。

「ここにあった塗装店は、社長が亡くなってどうなりましてか？」

ときにした何かの苦い体験が土台にあったのかもしれない。だが今はそれを知るすべがない。元気で生きていたら訊いてみたかった。そう思った高志は、帰りぎわに事務所に向かつて直立不動の姿勢をとり、社長がいた席に向かつて静かにこうべを垂れた。

そのまま帰宅する気になれなかった。いつの間にか海辺の砂浜を訪ねていた。辺りはすでに仄暗く、遠くのコンピナートに明りが灯りはじめている。風は止まっていた。うち沈んだ高志の瞳は静かに渚を濡らす波と残照の最後の赤みをとらえていた。砂浜には、シーズンが終って陸に上げられた商船や漁船が影絵のように並んでいた。その横には、明らかに今は使われていない船の残骸もあった。鯨が解体された跡のように湾曲した船の内部構造が無残にさらされている。

その日の高志の視線は新しい船にはなく、うらぶれた船の残骸に向けられていた。そこには過ぎ去った悲哀が醸し出す大切な何かが見え隠れしているような気がしてならないのだった。ふと、むかし夢中で絵を描いていたころのことを思い出した。いつか再びこうした廃船を描いてみたい気持ちに駆られ、指をたてて絵の構図を計るときポーズをとった。

そのとき黒い猫が黄色い眼をぎらつかせ、唐突に暗い船影から飛び出てきた。高志の視線はどす黒い船底に執拗に

「跡継ぎがいなかったみたいだね。今は相続のことでもめていて処分できないでいるらしいよ」

高志は再び、誰もいない事務所の前に立った。相続のことでもめているという隣人の言葉がひっかかった。そういえば、社長が今の奥さんとは籍を入れず苗字も違っていたのを思い出した。職場で一緒だったトシは社長の後を継がなかったのだろうか。あのあと大学に行ったという彼は今どんな生き方をしているのか。ここにいた素朴な人々々はみなどこへ行ってしまったのか。そんな疑問が次々と高志の想いに浮かんできた。

深閑とした駐車場に吹く風が黒ずんだ枯葉とビニール袋を一緒に捲き込んで回転させていた。高志にはその何気ない様子がなんとも言えず哀しげに感じられた。誰もいない暗い事務所のガラスを見つめながら、ある日の社長の言葉を思いだしていた。それは朝の会話だった。高志が職場に着いたとき、社長は珍しく職人たちと愉快そうに雑談していた。その前に何を話していたのかは分らないが、とにかく社長は上機嫌だった。美味しそうにタバコを上向きにすいながら言っていた。

「若いときに手いっぱい遊んでも、俺みたいにビシッとまともになるやつがいるからな」

周りは笑いに包まれていた。社長がなぜ囚人を更正させる活動に尽力するようになったかは分らない。自分が若い

向けられ、黒猫と目が合った。そっと近くにはじり寄り、砂の上に屈みこむようにして暗い淵を覗きこんだ。それはわずかな姿勢の変化だったが、何か途方もない時間を疾走したような気がした。美しいものも、醜いものも、みたくないものや忘れたいものも、すべての絵の具が混ざりあって濁った闇を作っていた。

錆びつき、貝殻だらけの船底が確かにそこにあった。黒猫は相変わらず睨みつけている。年老いた目ヤニだらけの老猫は、自分の棲家を荒らすなよ、とでも言いたげだ。その気迫に満ちた眼光をもつ存在は、何かに脅えながらも、それに必死で逆らおうとしているようだった。

高志はその視線から目をそらし、暫しのあいだ船底を凝視し続けた。そこにこそ彼の労働の記憶が凝縮されているに違いないのだ。

やがて高志はゆっくりと立ち上がったが、何か意味ありげに、帰ろうとひとことつぶやいて砂を蹴った。黒猫は驚いて身をひるがえし物影の闇に溶けた。

高志がくびすを返したとき、暗い雲間から粉雪が吹きつけ、海はたちまち陰鬱な鉛色に変わった。